



やっぱり心配… 中学校道徳教科書

昨年度の小学校に続き、今年度、中学校でも「特別の教科 道徳」(道徳科)が実施され、検定教科書を使用して道徳の授業が行われています。中学校道徳科の教科書について、道徳の授業との関連も含めて考えたいと思います。

がんばれの強要

頑張るアスリート、プロスポーツ選手、難病や障害を抱えた人の話などの教科書にも多数掲載されています。これらの教材の中には、例えば、自分の目標に向かって努力し、向上しようとする生き方を学べるものもあります。しかし、クラスの中には、自分とは違う世界と受け取る生徒もいるのではないのでしょうか。

また、多くの登場人物は、困難や失敗を乗り越え、絶えず努力し、頑張る「強者」であり、自分の弱さの克服を生徒に迫るものが多くあります。たとえば、「自分の弱さと戦え」(日本文教出版2年)では、車椅子テニス選手が取り上げられ、「自分が弱いんだ。弱さの原因を考えろ。そして自分の弱さと戦え」と叱咤激励しています。

問題を自分の心の持ち方に限定

人の心や感情は、社会や他者との関係の中で生じるものなのに、それが個人の問題にされ、自分の見方を変えれば、自分の世

界が変わると、ことさら強調されている教材がいくつかあります。

「ふきのとう」(教育出版3年)は、静岡県奥の山奥の無医村で働く一人の保健師の話です。彼女が、貧しい人々のために命を削った恩師(医師)を見習って頑張るという内容です。主人公がやりがいや使命感をもって仕事を自己実現の喜びは大切にしたいことです。しかし、主人公の心の動きをことさら問題にして、ひたすら頑張ることを称揚しています。

やりがいの強調だけでは過労死を招きかねません。現実の労働現場や労働条件の問題など、現実社会のあり方に目を向けたら、社会を変えていこうとしたりする視点も生徒には示してやりたいと思います。

また、「怒りのプロフィール帳」(学研教育みらい3年)では、アンガーマネジメント(怒りのコントロールの仕方)を紹介しています。感情的な言動によって自分や他人が傷つくことは避けるべきでしょう。しかし、怒りはコントロールするものと教えているだけで、怒りの原因を探っていくという内容になっていません。もっぱら自分に問題があるとしてしまい、自分の外に目を向けることを妨げています。

怒りの感情を持つことは否定されるものではありません。怒りは、ときには社会をよくする原動力にもなります。自分の要求を正当に伝える手段であったり、社会参加や手続きの方法を学んだりする主権者教育にもつながることがあります。

家事も育児も介護も母親？

「ライフ・ロール」(日本教科書3年)は、母親が、昇進を断って祖母の介護をすることになる話です。父親は、家事に関わらず、自分の仕事を優先し、3人姉妹は、そんな母を当たり前と認めていました。しかし、姉妹のうちの1人が、家庭以外での母にとっての役割に気づき始め、複雑な思いを持つようになります。

この教材を通して、介護制度や企業内の制度を利用する方法や家族での分担の見直しなど、家庭以外での母親の役割(昇進)を可能にするために、さまざまな角度から考え合えることができます。

一方、教材の扱い方によっては、母親の自己犠牲賛美によって家庭内の問題に片付けられてしまう恐れも生じます。

また、家族愛、家族生活の充実の項目では、多くの教科書において、女は仕事を持っていても家事も育児も介護もするものという扱いになっています。これでは、ジェンダー不平等の問題、つまり、人権の視点が見落とされかねません。

* ジェンダーとは社会的、文化的に作られた性のこと。それにより生じる不平等をジェンダー不平等という。性別を特定の役割に結び付けることであり、例えば、男は仕事で女は家事、ピンクは女の子の色で青は男の子の色などとすることで、役割や行動に制約を受けがちになる。イランでは、サッカーのスタジアムの

観戦が一般女性にやっと思われた。

恋愛は禁句？

中学校の道徳教科書には、シリーズ教材を扱っているものもあります。同じ主人公が3年間登場する教材で、教育出版では「チョコ」の行方「(1年)」、「たすきとポンポン」(2年)、「フットライト」(3年)がシリーズ教材です。

付き合いとはどういうことか、役割は性別で決まるのか、そして、自分らしさを大切にすることや、女らしさ・男らしさの常識を問い直し、個性を認めていくとする視点が含まれています。教師の発問や授業展開の工夫によっては、異性についての理解を深めることも可能です。

しかし、多くの教材は、内容に異性愛の芽生えが描かれているのに、あくまでも異性との友情で収めようとしています。

中学生は性的な存在でもあることに触れていません。思春期真っ只中の中学生は、人を好きになることに悩んだり、友情とは違った意識で相手を見始め、気になって仕方がないという感情に振り回されたりします。恋愛関係は、生徒が、お互いに相手を尊重し、対等に付き合い合える関係をつくる上で重要な課題の一つと考えられます。

学習指導要領には、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、(略)人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、(以下略)」とあります。恋愛について考えることは、まさにこれからの生き方を考える上での現実的な学びではないでしょうか。

多様な性の扱いがない

多くの教科書は、多様な性についてほとんど扱っていません。扱っている教科書の一つに、「自分らしい多様な生き方を共に実現させるためにできること」(学校図書2年)があります。多様な性についての基本情報や性のさまざまなあり方を説明したり、「LGBT」を表に載せたりしています。

一方、「だから歌い続ける」(日本教科書2年)は、歌が好きでトランスジェンダー(体の性と心の性が一致していない)の生徒の話ですが、性同一性障害を一般的な意味の「障害」のように扱っており、多様な性のあり方の一つという扱いになっておらず、国際的動向とかけ離れています。

多様な性の問題は、まさに今の社会の大きな課題であるだけに、正しい知識を知り、社会情勢を敏感に捉えて授業で生かしていく姿勢が教師に求められます。

歴史的背景を無視

性の多様性についての問題だけでなく、道徳で扱う課題は、現実的な問題と密接に関連しているものが多いです。

授業では、自然科学や社会科学の真理に沿って考えられるようにすることが重要になってきます。

特に、平和の問題では、戦前・戦中の「修身」が、「国のために命をかけて戦うべき」と戦争に駆り立てていった経緯を日本は持っています。歴史を教訓とするならば、戦後の道徳はこうしたことに敏感でなくてはならないはず。

「大地：八田與一の夢」(日本教科書1年)は、台湾のダム建設に監督として参加した八田が、地元の人に愛されているという話です。八田だけでなく、戦前の日本の植民地支配の下でも現地で暮わられた日本人もいたことでしょう。

しかし、一部の日本人をもって、日本はよいことをしたと誘導することのないようにしたいものです。歴史観は様々ありますが、日本の植民地政策の下の出来事であるという歴史を知らずに、この教材だけを学習することは、国際理解、国際貢献において一面的な見方になってしまふ恐れがあります。

教材は、歴史の事実をふまえたものであることが望ましいと考えられます。

多様な考えが出し合える授業を

道徳の指導については、文科省は、「答えが一つではない道徳の課題を一人一人の生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う『考える道徳』『議論する道徳』を目指しています。

そのためには、教材が、目の前の生徒の現実にあっているか、この教材で傷つく生徒はいないかなど、冷静に教材を見直したいものです。そして、よりよい資料を活用したり、授業の進め方や発問を考えたりすることが大切になってきます。

また、学年などの教師集団でも、教材について考え合いたいものです。

授業での話し合いを通して、身のまわりのことから社会の問題まで、自分との関わりを含めて考え、自分の生き方を自分で決めていく力を培っていききたいものです。

それは、主権者として生きることや、自分のしあわせのためにどう生きていくのかを考えることにつながり、子どもたちにとっての大切な学びになります。